

生活科学部

1 室内空気汚染化学物質の標準試験法の開発・規格化および国際規制状況に関する研究

田原麻衣子¹⁾、千葉真弘、大泉詩織、大貫 文²⁾、角田徳子²⁾、田中礼子³⁾、村木沙織³⁾、西以和貴⁴⁾、吉富太一⁴⁾、大嶋直浩¹⁾
酒井信夫編、厚生労働行政推進調査事業費補助金（化学物質リスク研究事業）「室内空気汚染化学物質の標準試験法の開発・規格化および国際規制状況に関する研究」、令和4年度分担研究報告書、国立医薬品食品衛生研究所、川崎、令和5年3月

厚生労働省が示している「室内空气中化学物質の測定マニュアル（暫定案）」のうち、固相吸着－加熱脱離－ガスクロマトグラフィー／質量分析法による揮発性化合物の分析について、カーボンを含む捕集管を用いた分析についての検討を行った。またアルデヒドの測定マニュアルについて、改訂作業を行った。

¹⁾国立医薬品食品衛生研究所、²⁾東京都健康安全研究センター、³⁾横浜市衛生研究所、⁴⁾神奈川県衛生研究所

食品科学部

2 食品に残留する農薬等の成分である物質の試験法開発・検証業務

岡部 亮、高橋 諒、羽賀美優、青柳光敏

北海道立衛生研究所食品科学部食品安全グループ編、食品に残留する農薬等の成分である物質の試験法開発事業報告書（フルジオキシニル試験法－畜産物－）、北海道立衛生研究所、札幌、令和6年3月

ポジティブリスト制度において現在までに公定試験法が確立されていない農薬等のうち「フルジオキシニル」について試験溶液の調製法及び機器分析の諸条件等を検討し、畜産物へ適用する個別試験法を開発した。

3 ダイオキシン類等有害物質摂取量の評価とその手法開発のための研究（1-2）トータルダイエツト試料の分析によるPCBs 摂取量推定

堤 智昭¹⁾、高附 巧¹⁾、張 天齊¹⁾、鍋師裕美¹⁾、青柳直樹、市橋大山、吉崎麻友子²⁾、堀 里実³⁾、高橋京子³⁾、森田昌弘³⁾、宮崎仁志⁴⁾、高木恭子⁴⁾、新宅沙織⁵⁾、安永 恵⁶⁾、荻田 幸⁶⁾、仲眞弘樹⁷⁾、大城聡子⁷⁾、飛石和大⁸⁾、佐藤 環⁸⁾、古谷貴志⁸⁾、吉富秀亮⁸⁾、堀 就英⁸⁾

厚生労働行政推進調査事業費補助金（食品の安全確保推進研究事業）「食品を介したダイオキシン類等有害物質摂取量の評価とその手法開発のための研究」令和5年度分担研究報告書、国立医薬品食品衛生研究所、東京、令和5年5月
マーケットバスケット方式によるトータルダイエツト（TD）試料を用いて、ポリ塩化ビフェニル（PCBs）の国民平均一日摂取量を推定した。過去の研究からPCBs摂取量に占める割合の高い食品群である10群（魚介類）と11群（肉類、卵類）のみを対象にPCBs異性体分析を実施した。その結果、総PCBsの全国平均摂取量は、270 ng/person/dayと推定された。また、推定された摂取量は、WHOのTDIの27％程度に相当した。

¹⁾国立医薬品食品衛生研究所、²⁾新潟県保健環境科学研究所、³⁾横浜市衛生研究所、⁴⁾名古屋市衛生研究所、⁵⁾和歌山県環境衛生研究センター、⁶⁾香川県環境保健研究センター、⁷⁾沖縄県衛生環境研究所、⁸⁾福岡県保健環境研究所

感染症疫学部

4 食品由来感染症の病原体解析の手法及び病原体情報の共有に関する研究

岩渕香織¹⁾、森本 洋、小川恵子、竹脇優太郎、佐藤 凜、石黒真琴²⁾、尾島拓也²⁾、山上剛志³⁾、高橋洋平³⁾、長内志保美³⁾、今野貴之⁴⁾、瀬戸順次⁵⁾、三瓶美香⁵⁾、矢崎知子⁶⁾、山谷聡子⁶⁾、大下美穂⁷⁾、柳沼 幸⁸⁾、賀澤 優⁸⁾、川瀬雅雄⁹⁾、坂井裕生¹⁰⁾

泉谷秀昌編、厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）「食品由来感染症の病原体解析の手法及び病原体情報の共有に関する研究」令和4年度総括・研究分担研究報告書、国立感染症研究所、東京、令和5年4月、pp.28-40

腸管出血性大腸菌（EHEC）の菌株を比較する分子疫学的手法として地衛研で実施されている PFGE、IS-PS、MLVA の3法について、信頼性を確保するために精度管理の実施及び検査法についてのアンケート調査を行った。また、本研究担当者間における情報共有と研究代表者及び担当者間研究代表者との連携を深めるため研修会を開催した。MLVA のデータ解析法や他の食品由来感染症の検査法について情報を得る機会となった。

¹⁾岩手県環境保健研究センター、²⁾札幌市保健福祉局衛生研究所、³⁾青森県環境保健研究センター、⁴⁾秋田県健康環境センター、⁵⁾山形県衛生研究所、⁶⁾宮城県保健環境センター、⁷⁾仙台市衛生研究所、⁸⁾福島県衛生研究所、⁹⁾新潟県保健環境科学研究所、¹⁰⁾新潟市衛生環境研究所

感染症部

5 全国地研ネットワークに基づく食品およびヒトから分離されるサルモネラ、大腸菌、カンピロバクター等の薬剤耐性の動向調査

四宮博人¹⁾、小川恵子、山上剛志²⁾、高橋洋平²⁾、長内志保美²⁾、佐藤千鶴子³⁾、矢崎知子³⁾、山谷聡子³⁾、椎名麻衣³⁾、倉園貴至⁴⁾、小西典子⁵⁾、植田菜月⁶⁾、安藤直史⁶⁾、鈴木美雪⁷⁾、政岡智佳⁷⁾、後藤千恵子⁸⁾、小泉充正⁸⁾、柳本恵太⁹⁾、木全恵子¹⁰⁾、前西絵美¹⁰⁾、磯部順子¹⁰⁾、岩崎理美¹¹⁾、横山孝治¹¹⁾、永田暁洋¹¹⁾、東方美保¹¹⁾、石森治樹¹¹⁾、柴田伸一郎¹²⁾、梅田俊太郎¹²⁾、市川 隆¹²⁾、西島駿弥¹³⁾、若林友騎¹³⁾、坂田淳子¹³⁾、梅川奈央¹³⁾、河原隆二¹³⁾、岩崎直昭¹⁴⁾、田野貴仁¹⁴⁾、齊藤悦子¹⁵⁾、荻田堅一¹⁵⁾、井上ゆみ子¹⁶⁾、川上優太¹⁷⁾、林 宏樹¹⁷⁾、野村亮二¹⁷⁾、河合央博¹⁸⁾、梶原知博¹⁸⁾、岡田達郎¹⁸⁾、蔵田和正¹⁹⁾、末永朱美¹⁹⁾、池田伸代¹⁹⁾、千神彩香¹⁹⁾、大原有希絵¹⁹⁾、福田千恵美²⁰⁾、関 和美²⁰⁾、岩下陽子²⁰⁾、目黒響子²⁰⁾、濱田建一郎²¹⁾、中村悦子²¹⁾、上野可南子²¹⁾、浅野由紀子¹⁾、氏家絢子¹⁾、矢儀田優佳¹⁾、青木紀子¹⁾

菅井基行編、厚生労働科学研究費補助金（食品の安全確保推進研究事業）「ワンヘルスに基づく食品由来薬剤耐性菌のサーベイランス体制強化のための研究」令和4年度総括・分担研究報告書、国立感染症研究所、東京、令和5年5月、pp.9-31

ヒト及び食品由来サルモネラ、大腸菌、カンピロバクターについて薬剤耐性状況を調査した。サルモネラについては、ヒト由来株の30.5%と食品由来株の90.9%が耐性を示し、共通して分離された血清型の耐性傾向に類似性があった。大腸菌については、ヒト由来株の35.0%と食品由来株の48.6%が耐性を示した。*Campylobacter jejuni* と *C. coli* はともにヒト由来株と食品由来株の耐性傾向に類似性があった。サルモネラ及びカンピロバクターでは、食品由来耐性菌とヒト由来耐性菌との関連が強く示唆された。

¹⁾愛媛県立衛生環境研究所、²⁾青森県環境保健センター、³⁾宮城県保健環境センター、⁴⁾埼玉県衛生研究所、⁵⁾東京都健康安全研究センター、⁶⁾千葉県衛生研究所、⁷⁾神奈川県衛生研究所、⁸⁾横浜市衛生研究所、⁹⁾山梨県衛生環境研究所、¹⁰⁾富山県衛生研究所、¹¹⁾福井県衛生環境研究センター、¹²⁾名古屋市衛生研究所、¹³⁾大阪健康安全基盤研究所、¹⁴⁾堺市衛生研究所、¹⁵⁾兵庫県立健康科学研究所、¹⁶⁾奈良県保健研究センター、¹⁷⁾鳥根県保健環境科学研究所、¹⁸⁾岡山県環境保健センター、¹⁹⁾広島市衛生研究所、²⁰⁾香川県環境保健研究センター、²¹⁾北九州市保健環境研究所